

解

題

一、僧綱について

寺院および僧尼を監督する国家機関が治部省で、そのうちの玄蕃寮が直接事務運営を行う。玄とは黒、すなわち僧尼の着用する黒衣の意で、蕃は外蕃、すなわち外国関係のことで、玄蕃寮はこの二つのことを扱う。さらにこの玄蕃寮のもとにあって、寺院、僧尼のことを専門に監督するのが僧綱で、いわば僧尼の中央行政機関の役目を果す。その職員は僧侶である。推古天皇三十二年（六二四）に一僧侶がその祖父を斧で殴る事件が起り、これに端を発して僧尼の監督のため、僧正・僧都・法頭が任命されたのに始まる。弘仁十年（八一九）に僧正・大僧都・少僧都各一人、律師四人となり、これら僧綱を補佐するものとして威儀師（六人）、従儀師（八人）なども加えられ、ほかに大僧正もおかれることがあったが、定置の官ではない。さらに貞観六年（八六四）に僧位三階の法印・法眼・法橋が加わった。応徳三年（一〇八六）には僧正以下五十三人となり、その定員は後さらに増加していった。

僧綱の任期はなく、ふつう律師から昇進する。ただし、辞官・讓官が認められており、罪科を負えば免官させられ、功績のあった場合贈官のことが行われるなど、一般官人と同じ扱いであった。僧綱が執務を行なう僧綱所（綱所とも）は、はじめ定まった場所がなかったが、養老六年（七二二）以後は奈良の薬師寺に、平安京遷都以後は東寺西寺におかれたが、やがて不明となった。律令官制の弛緩とともに、僧綱が僧尼を統制する役割を喪失し、ただ単なる上級僧侶としての榮譽ある官位としての意味しか持たなくなったからでもある。鎌倉時代以後は幕府の介入もあり、さらに形式化し、寺格によって各宗各寺院などが一定の僧官を受けることが風習化し、売官などもおこった。僧綱補任記載の官位について主要なものを略述しておく。

僧正 ソウジヨウ。僧尼の濫行不正を正すことを司る、最上位の僧官。はじめ一人であったが、大僧正、僧正（正

僧正）、権僧正の三階にわかれた。大僧正は一人と限っており、定置の官ではなかったが、正僧正以下の定員は変動がある。『愚管抄』（第七）に「僧正故院御時（後白河法皇）マデモ五人ニハスギザリキ、当時正僧正一度ニ五人イデキテ十三人マデアルニヤ、権僧正又十余人アルニコソ」といわれたほど後代には多くなった。俗官との相当も時代によって異なるが、大僧正が大納言、僧正が中納言、権僧正が参議（『親家官班記』）などといわれる。

僧都 ソウズ。都は統の意で僧正について僧尼を統べる官。はじめ一人であったが、これものに大僧都、権大僧都、僧都、少僧都、権少僧都の五階にわかれ、定員も大幅に異動がある。応徳三年（一〇八六）大僧都五人、少僧都八人、保安二年（一一二二）権大僧都八人などとなっている。清少納言も「僧都、僧正になりぬれば、仏のあらはれ給へるにこそとおぼしまどひて、かしこまるさまは、何にかは似たる」（『枕草子』一八四、位こそと諸人尊敬の有様を記している。しかし、しだいに権門の子弟が僧界に進出し、皇子は権大僧都、皇孫、摂関の子弟のものは権少僧都に直任される例も出て僧綱の叙任は混乱するようになっていった。

律師 リツシ。十法を具足し、衆僧に戒律を示す師の意。はじめ一人であったが、一時大律師、中律師、律師（天平神護二年―延暦十三年）の三階の時期があり、のち律師、権律師の二階となった。律師（正）は延暦五年（七八六）六人、応徳三年（一〇八六）十五人などと増えている。権律師もはじめの二人から貞観六年（八六四）八人、永延元年（九八七）十三人、保延七年（一一四二）二十人、さらにその後も増加した。『愚管抄』（第七）には「正員ノ律師百五十人ニナリヌルニヤ」とある。弘安八年（一二八五）律師をもって俗人の五位殿上人に准じ、公の行事出仕については従僧二人、中童子二人、大童子四人の従者を認められた。

法務 ホウム。僧職の一。僧綱所の長官で、諸寺の法事、僧尼度縁などの事を管掌する。はじめ一人であったが、

貞観十三年（八七二）正法務、権法務の二階二人となる。正法務は東寺の一長者がなり、諸寺の僧は権法務と定まった。また一時三法務並置の時もあり、のち総法務職が設けられるなど性格を変えていった。

法印 ホウイン。僧綱の位階で正しくは法印大和尚位。僧正の階で、僧位の最高位。貞観六年（八六四）制定。定員ははじめ二人であったが、応徳三年（一〇八六）四人（うち大僧都二人、長承二年（一一三三）法印大僧都七人と見え数を増した。少僧都、律師でまれに法印に叙せられるものもあり、長保五年（一〇〇三）以来僧官をもたない、いわゆる散位僧綱（石清水八幡校聖清、法印となる）が現われるようになった。

法眼 ホウゲン。法印につぐ僧綱の位階で、正しくは法眼和上位。貞観六年（八六四）制定、僧都に授けられる階。定員は応徳三年（一〇八六）五人と定められたが、寛治六年（一〇九二）十一人と見え、以後次第に増加している。貞観十一年（八六九）遍昭が僧綱以外から叙任されて以来、貴顕の子息が多くこの階に直任された。

法橋 ホツキョウ。法眼につぐ僧綱の位階で、正しくは法橋上人位。貞観六年（八六四）制定。律師に授けられる階。はじめ法橋上人位律師四人、法橋上人位権律師六人が叙せられたが、応徳元年（一〇八四）には二十人と見え、同三年定員を法橋十八人としたが、その後増加し、例の『愚管抄』（第七）では「故院御時（後白河法皇）百法橋ト云テアザミケン事ノヤサシサヨ（恥かしさよ）」とあるほどである。延喜三年（九〇三）天台座主長意が僧綱の官なく叙任され、以後直叙の例もある。

威儀師 イギシ。威儀を教える師の意。法会や授戒等のさい、衆僧を指南しその威儀を整えさせる役僧。宝亀二年（七七二）六人の定員が認められたが、以後かならずしも明確ではない。大威儀師、小威儀師、権威儀師などがあり、大威儀師は法橋に叙せられるという。この威儀師に従うものに従儀師があり、はじめ定員八名であった。

已講 イコウ。奈良の三会、すなわち興福寺維摩会、薬師寺最勝会、宮中御齋会の講師を勤め終った僧の称。已講

のうちから順次僧綱に任ぜられることを例とした。のち天台の三会（法勝寺大乘会、円宗寺法華会、最勝会）の講師を勤めたものも已講といわれ、おなじ扱いとなった。

講師 コウシ。法華会、最勝会などの法会において、經典の義を講演する役僧。とくに興福寺維摩会の講師を勤めるものは、翌年正月の宮中御齋会、三月の薬師寺最勝会の講師となるのが通例で、やがて已講とよばれ、僧綱入りをする。なお講師は諸国に常置された別の職があり、注意を要す。この方は諸国にあって、その地の僧尼を監督、あわせて仏教を講説した。

探題 タンダイ。題者とも。法会などで經典の論義が行われる時、題を択び論題を定める役。場合によっては論義の判定（証義、精義、ショウギ）者をも兼ねることがある。

堅者 リツシャ。堅義（者）・立義（リュウギ）とも。勅会における論義の席において出題者（探題）の提示した論題にたいして義を立て、問者の質問に答える役。興福寺維摩会がとくに著名で、この役を勤たものが、つぎの同会の講師の資格を獲得する。したがって僧綱補任にはこの僧名が掲げられるわけである。のち天台宗でも六月の法華大会の及第者は堅者とよばれた。

得業 トクゴウ。奈良の三会の堅者を勤めた者の称。のち天台宗でもこれに准じてよばれた。

阿闍梨 アジャリ。アザリ。弟子の行為を矯正し、その軌則師範となるべき高僧の称であったが、わが国では天台・真言両宗（密教）の公職となった。級に大阿闍梨と小阿闍梨の二階があり、七高山阿闍梨（比叡山、比良山、伊吹山、愛宕山、金峯山、葛木山、神峯寺の七所で春秋二季薬師悔過を行い五穀豊穡を祈る役僧）、伝法阿闍梨（天台・真言両宗において大法を伝授できる僧）、一身阿闍梨（名門出身者に与えられた特別職で、その身一代に限って伝法の資格をもつ）などが著名であるが、他の諸寺においても設置されている。定員等については明らかではない。

二、僧綱補任の諸本

僧綱の叙任、昇進などを歴年により記載したのが僧綱補任である。現存する僧綱補任を内容などから分類するとつぎのようになる。

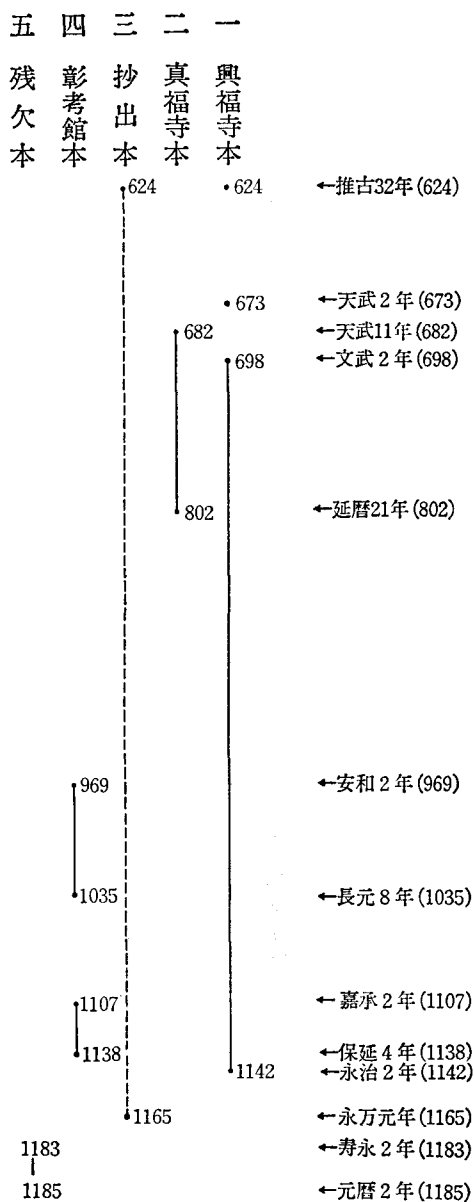
- 一 興福寺本僧綱補任 推古天皇三十二年(六二四)―永治二年(一〇七二)〔康治元年、一一四二〕
- 二 真福寺本僧綱補任(七大寺年表) 天武天皇十一年(六八二)―延暦二十一年(八〇二)
- 三 東大寺本僧綱補任抄出 推古天皇三十二年(六二四)―永萬元年(一一六五)
- 四 彰考館文庫二冊本僧綱補任 安和二年(九六九)―長元八年(一〇三五) 嘉承二年(一一〇七)―保延四年(一一三八)

五 残欠本僧綱補任 寿永二年(一一八三)―元暦二年(一一八五)

なお年次的な対比は次頁の表のようになる。

これらの五種のうち、四、五は別種類のものであるが、残りの一―三は内容上密接な関係をもつ。

一は「六巻にて、巻一に僧綱補任歴と記し、『推古天皇位卅二年、申始被下僧綱宣旨』とありて、卷六康治元年に至れり。古文書の紙背に記したるものにて、中に平清盛の書あり。興福寺の所蔵にて、明治四十三年、国宝に指定せられたり。」(和田英松『本朝書籍目録考証』)とある。表紙は鎌倉中期改装と考えられ、本文料紙は穀紙、筆者不明。たゞし平安期の写本である。法量は、巻一、全長一七二三・〇センチ、縦二九・八五センチ、紙数四三紙(表紙共)。巻二、全長二二二七・〇センチ、縦二九・八五センチ、紙数四二紙。巻三、全長三〇八五・〇センチ、縦二六・三〇セ



ンチ、紙数六〇紙。卷四、全長二八八三・三センチ、縦二九・七〇センチ、紙数五四紙。卷五、全長三四三九・三センチ、縦二九・七〇センチ、紙数六四紙。卷六、全長二一五五・七センチ、縦二九・七〇センチ、紙数四一紙（『奈良大寺大観』興福寺一による）。現重要文化財。その記述は推古天皇即位三十二年（六二四）から近衛天皇の永治二年（一一四二）まで、五百十九年間の補任である。ただし、推古天皇三十三年から天武天皇元年（六七二）までの四十八年間に相当する部分は破損し、さらに天武天皇三年から文武天皇元年（六九七）までの二十三年間は記文がない。恐らく文武天皇以前は資料不足のため歴年ではなかったと思われる。文武天皇二年以後永治二年までは歴

年で欠ける年次はない。推古朝の僧正・僧都・法頭からはじめ、大僧正・僧正・権僧正・大僧都・権大僧都・少僧都・権少僧都・律師・権律師、法印・法眼・法橋、さらに法務、座主、阿闍梨なども見え、叙任、昇進、入滅など一々該当年次の項に註記している。承和四年（八三七）以後は僧綱に關係深い維摩会講師の人名をも記し、下つては熊野、石清水八幡の別当や、仏師等の補任も一部に見える。興福寺蔵本以外に伝本は知られておらず、わずかに東京大学史料編纂所にその影写本が存する。しかし、『大日本仏教全書』中、興福寺叢書第一に収められているので容易に見ることができる。

この興福寺本を根幹として、奈良東大寺東南院の僧惠珍（一一八一—一六九）が『扶桑略記』を主とし、さらに国史、『日本名僧伝』『日本往生極楽記』『鑑真和尚東征伝』『東大寺要録』などを加えて、永万元年（一一六五）十二冊の「僧綱補任」を作った。しかし、この十二冊本は散佚してしまい、わずかに残欠二冊として現存し、それが二であることが平田俊春氏によって指摘されている（『日本古典の成立の研究』）。

二は現在『七大寺年表』の名で名古屋真福寺（宝生院）に蔵されている。永万元年（一一六五）写本、二巻。縦九寸九分、全長上巻三丈三尺七寸五分、下巻三丈四尺一分。上巻前欠、白鳳十一年（六八二）に始り天平宝字元年（七五七）迄、下巻同二年より延暦廿一年（八〇二）に終る。続群書類従本（巻七九二）の原本。明治三十八年国宝指定（現重要文化財）とされている（真福寺善本目録）。下巻の奥書およびつぎにふれる三の書の識語によって本書はもと十二巻で東大寺東南院の経蔵にあった惠珍撰の「僧綱補任」であったとされている。真福寺にいつ移ったか明らかではないが、首部を欠き、残欠本でもあったためいつか『七大寺年表』と誤認されたものである。ただ本書の編者を惠珍とすることに若干の疑念がある。すなわち下巻の奥書はつぎのようなもので

永万元年十月比書了。惠珍之。一校了。不審更多

交合三本取要付註。同註相違事。其中不審猶多。真偽難決歟。重註付良本了

但註本相違。不審猶多。為之如何。重可合勝本歟

又読合了。略註付了

この奥書は一筆で、これによれば永万元年に恵珍が本書を書写したと。校定したところ不審が多いので、三本により再び校合、相違を註記した。さらに良本、勝本により校合しているというのである。本書の記述はすでにふれたように、「興福寺本僧綱補任十扶桑略記以下」であるので、校合書を『扶桑略記』以下の書とすれば、本書の編纂者は問題なく恵珍となろう。ただ右の記述からは、同種類本の校合と思われる以上の書き方はしていないように判読される。そうすると恵珍は本書の書写者であり補註者の位置でしかないということになる。ところが本書はもと十二卷であり、その最下限が恵珍書写の永万元年と一致していたことを証する資料がある。それが三である。

三は『群書類従』（巻五四）に収められ『僧綱補任抄出』といわれている。これは『七大寺年表』と誤認されている書が散佚する以前、東大寺にあり、それを深賢（一二二六）が二巻の本に抄出したものである。所収年次は推古天皇三十二年（六二四）から六条天皇の永万元年（一二六五）まで僧綱補任の簡略な年代記で、寺院、僧侶、法会などに関する記事も略記している。本書の冒頭に、

東大寺東南院経藏本十二卷忠珍僧都撰、粗一見之次、処々抄書了、更不可及外見者也 深賢記

とある。本書と『七大寺年表』と重複する箇所を對比すると（後述）、明らかに本書は『七大寺年表』の抄出の位置にある。忠珍の忠は恵の誤写と考えるべきで、本書のこの識語によって二はもと十二巻本、恵珍撰となる。しかも本書の所収の最下限は六条院を新院とよび、永万元年すなわちさきの恵珍が書写した年次と一致しているのである。こうして編者恵珍説は確定したかに思える。ただここでも六条院を新院としていることに若干の疑念が残る。六条院は永

万元年六月に即位、三年後の仁安三年に高倉天皇に位を譲られて新院となる。したがって永万元年には六条天皇は新院とはよばれ得ない。だからこの条は恵珍が永万元年に十二巻本を編した内容そのままの抄出ではないことになる。このことはさらにいくつかの場合を考えさせることになる。深賢が抄した本書は恵珍が編したそのものではなく、若干書き変えがある。その書き変えは深賢か。または恵珍が永万元年に書写した十二巻本とは最下限が永万元年ではなく、これより遡った年次で、これに書き継ぎがあったか、などである。これらの結論は早々に下せないで、ここではすでにのべているように十二巻本が恵珍の撰であることに疑念の余地があることを指摘することにとどめたい。

一―三の三書の記載内容の関連について『七大寺年表』を中心にみてみよう。

和銅三年庚戌

〔三月辛酉日始遷都。從難波宮移御奈良京。定左右京条坊。『入唐字問僧道顯始柑子木植之』
金明
同帝

僧正 義淵

大僧都 善往

少僧都 弁昭

律師 僧昭』

弁通

〔三月〕右大臣藤原朝臣不比等。於大和国平城京。「始建興福寺」金堂。先是大織冠内大臣。由蘇我入鹿誅害事。発願 奉造金色釈迦丈六像一軀・挟持菩薩二体、其後天智天皇八年己巳冬十月大織冠枕席不安之比。忽構伽藍安置件像。内大臣薨後。所移起也。〔同年移造大官寺於平城京〕

(僧綱補任裏書、『始建興福寺』)

和銅三年(七一〇)条の『七大寺年表』の全文であるが、このうち『』の部分で、興福寺六冊本僧綱補任の記文である。この年入唐僧道願が柑子を始めて植えた記事(厳密には興福寺本は『入唐學問僧道願始持來柑子。仍令殖』とあり少し異なるが意味は全く同じ)を註記し、僧正義淵から律師僧昭まで四人の僧綱を列記し、裏書に興福寺の建立を記したので、一見して『七大寺年表』はこれを増補したことが明らかである。すなわち僧綱では律師弁通を補い、このほか遷都の記事、興福寺建立の経緯などを加えている。しかもこの条の附加部はすべて『扶桑略記』の記事によること、すでに平田俊春氏(前掲書)の指摘されるところである。そして「」部が深賢の『僧綱補任抄出』の記述のすべてであり、(厳密には最尾の大官寺を「大安寺」としているがこれは同寺名、抄出はまさに『七大寺年表』からのものであることが明瞭である。この対比はわずか一ヶ年であるが、三書の関係は重複部全部にわたってこの関係にある。したがって図式的に言えば、六冊本興福寺僧綱補任を増補したものが、十二冊本僧綱補任(現在残欠)で、これを抄出したものが、僧綱補任抄出ということになる。

四は「二冊あり、縦横の罫引に、僧正、僧都等の欄を設けて記入したり。卷一は、安和二年(九六九)より、長元八年(一〇三五)に至り、卷二は、嘉承二年(一一〇七)より、保延四年(一一三八)に至れり。安和以前、及び長元九年より、嘉承元年に至る七十一ヶ年欠けたり。蓋しもとは、後一条天皇より堀河天皇までを一巻に収めたりしものならん。この書は、鳥羽天皇を新院とし、崇徳天皇を今上として、朱書にて、新院太子と註せり。これによれば、崇徳天皇の御代になりたるものなり。これは水戸彰考館所蔵にて、紙背にも記入したところあり」(和田英松前掲書)といわれている。折本、二帖。縦三〇・八センチ、横一七・五センチ。室町期の書写。本書の冒頭部と興福寺本僧綱補任の同項を対比して、両者の差異を見ることがしよう。

彰考館二冊本僧綱補任(冒頭)

円融法皇 八月十三日戊子受禪。九月廿三日即位大極殿。時年十一。在位十五年。村上第五子。母同前

安和二年_巳

講師法縁_{三輪宗 年六十三 慶四十三 天台聖教 依病辭退 宣旨}

僧正 寛空_{東寺長者 法務}

大僧都光智

権 観理

少僧都救世_{東寺長者}

安秀_{興福寺 別当}

権 寛静

法蔵_{正月三日卒 六十五}

良源_{延暦寺座主}

安鏡_{三月十日任}

寛忠_{三月十日任 開五月十日任 東寺長者 法務}

律 師行誉

定昭_{東寺長者}

禅芸_{三月十日転 六月廿三日補定心院十禅師}

興福寺本僧綱補任

(ABC、abcは本書の順序、上段ト対比ノタメ位置ヲ移動ス)

安和二年_巳

講師 法縁_{三輪宗 東大寺(天台聖教辭退替)(コレ最末ノ 宣旨)}

僧正 寛空_(法務)

大僧都光智

権大僧都観理

小僧都救世_(月日入滅 八十二)

安秀

権小僧都寛静

法蔵_{正月三日入滅 六十二}

良源_{山座主}

律 師安鏡_{三月十一日転任権小僧都 八十三}

C 寛忠_{三月十一日転任権小僧都 六十三}

B 行誉

A 定昭

権律師禅芸_(同日転正 六十八)

権

長勇 六月五日転

長燭

陽生

在禪雲下

藏祚 法相宗

三月十日任。三会。年六十六。大法師入室。藥師寺。推入室弟。裏書。基惟大法師者慈念律師入

室。唐保元年
三会講師也

千攀 真言宗

三月十日任。卿加持。年五十九。臘三十。東大寺。左京人。内供奉十禪師遍勝弟子。天德

二年五月日補入寺僧。素光寺門跡。遍勝者内僧

大法師之受法弟子。円傳者益僧僧正受法弟子

余慶 天台宗

三月十日任。年五十五。臘四十六。六月十

延曆寺

九日補定心院十僧。律師明仙弟子。康保

三年十一月廿七日為延曆寺阿闍梨。行書律師受法灌頂

弟子也。依行書奏為阿闍梨。承平五年七月二日得度受

戒。筑前國人云々

暹賀 天台宗 三月十日任（或任日、不詳）年五十五。臘

延曆寺

三十七。或本不歷律師云々。少僧都良源弟

子。又基増已講弟子。承平元年四月十四日得度受戒。

安和元年二月十九日依増恒奏為元慶寺阿闍梨。年月日

補内供奉十禪師。件基増者良茂大法師弟子。奈良補任

云。私師連日者。（裏書）或本云。師主連日定額。件定

額者本真房理

仙大德弟子也

長勇 六月五日転正
(六十五)

長燭

陽生

b 藏祚 同日任。法相宗。藥師寺

已講劣。大和國人。当麻氏六十五

c 千攀 五月廿八日任。真言宗。東大寺。御持僧勞

a 余慶 三月十日任。天台宗。延曆寺

明陰律師弟子。筑前國(五十二)

(冒頭ノ記述ハコノ位置)
(講師法縁) 堅者定祐 次忠管

両書の対比によって明らかなようにいずれかが他書を増補したというような位置関係にはない。興福寺本が昇進のさいには前官の位置に昇進年月日、昇進官職を記すのに対し、彰考館二冊本は昇進した官職に移動させている。(例、安鏡、律師→権少僧都)。そのほか昇進月日、年令等に差違が著しく、初出項における前歴は、彰考館本の方が遥かに詳細となっている。両書相違する場合、彰考館本が正しいとは必ずしもいえず、両者の正誤は一一の検討によるべき

で、今後の課題であろう。

五は寿永二年（一一八三）から元暦二年（一一八五）のわずか三ヶ年の残欠である。この頃は僧綱の員数が飛躍的に増加しているので、本書が散佚していなければ膨大なものであったと思われる。たとえば寿永二年の記載を見れば、見任僧綱 大僧正一、僧正二、権僧正四、大僧都二十一、少僧都二十二、律師三十一、法印二十七、法眼三十四、法橋八十九

前僧綱 大僧正一、僧正一、権僧正二、大僧都二、少僧都五、律師四

大威儀師二、威儀師十六、従儀師十、維摩注記三、三会十八、二会十三、東寺灌頂十二、天台灌頂二

八幡 法印権大僧都一、法印三、法眼三、法橋四

熊野 法眼五、法橋九

仏師 法印一、法眼二、法橋八、経師（法橋）二

住学生 興福寺十二、延暦寺十二、園城寺十二、定額四、野伏六

内供奉 東寺二、延暦寺四、園城寺四

となっている。注記については年令、法属、所属等簡略なものである。また、全体的に誤字等が多く、本文校定の問題が残っている。宮内庁書陵部に近世末写三冊本があるほか、東京大学、静嘉堂文庫など数本の書が知られている。なお、寿永三年、元暦二年の項は『大日本仏教全書』中、伝記叢書のなかに活字化されている。